

## 生かされて生きる

ルカによる福音書 20 : 27 - 40

20:27さて、復活があることを否定するサドカイ派の人々が何人か近寄って来て、イエスに尋ねた。20:28「先生、モーセはわたしたちのために書いています。『ある人の兄が妻をめとり、子がなくて死んだ場合、その弟は兄嫁と結婚して、兄の跡継ぎをもうけねばならない』と。20:29ところで、七人の兄弟がいました。長男が妻を迎えましたが、子がないまま死にました。20:30次男、20:31三男と次々にこの女を妻にしましたが、七人とも同じように子供を残さないで死にました。20:32最後にその女も死にました。20:33すると復活の時、その女はだれの妻になるのでしょうか。七人ともその女を妻にしたのです。」20:34イエスは言われた。「この世の子らはめとったり嫁いだりするが、20:35次の世に入って死者の中から復活するのにふさわしいとされた人々は、めとることも嫁ぐこともない。20:36この人たちは、もはや死ぬことがない。天使に等しい者であり、復活にあずかる者として、神の子だからである。20:37死者が復活することは、モーセも『柴』の個所で、主をアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神と呼んで、示している。20:38神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神なのだ。すべての人は、神によって生きているからである。」20:39そこで、律法学者の中には、「先生、立派なお答えです」と言う者もいた。20:40彼らは、もはや何もあえて尋ねようとはしなかった。

イエスを試すために、サドカイ派の人々がやってきました。サドカイ派はファリサイ派と復活をめぐる論争をしていました。両派の論争は、教えが書かれている文書の中で、何を聖典とするかに端を発しています。サドカイ派は旧約聖書の最初の五書のみを聖典とし、ファリサイ派はその他の文書も聖典と考えていました。復活については前半の五書には書かれておらず、後半の文書にのみ書かれていたので、当然サドカイ派は復活を否定し、ファリサイ派は復活はあると主張していました。

前半の五書には、家系を絶やさないように、兄が死んだ場合の掟がありました。それは弟がその嫁を娶って子孫を残さなければならない義務があったのです。サドカイ派は、七人の兄弟が子を残さず次々に死んだ場合、復活の時には誰がその夫になるのかと聞いてきたのです。人を馬鹿に

したような議論ですが、死人の復活を想定した場合にはそうなるではないかという訳です。

この議論に対してイエス様は、ファリサイ派とサドカイ派の両者を否定されました。ファリサイ派に対しては、復活は認めるものの、復活後の生を現世での生活の延長のように考えることを否定しました。ファリサイ派の復活理解は今の生活がそのままもっと繁栄したものになるというものだったようです。つまり、「娶ったり嫁いだり」ということです。当時結婚して子を設けるということには一族の生存がかかっていました。「産めよ増やせよ」(創世記1:28)ということで、それは経済的な成功と繁栄を象徴していました。イエスは、復活は肯定しましたが、ファリサイ派の考え方にひそかに忍び込んでいた欲望は否定されたのです。復活後の世界に欲を持ち込むことはできないのです。

サドカイ派に対してイエス様は、彼ら自身が大切にしていた五書から引用し、復活はあるということを論証します。「『柴』の箇所」というのは、五書のうちの二番目の文書、出エジプト記の3章です。燃えている柴を見つけたモーセは、それがいついまでも燃え尽きないのを不思議に思って近づいていくと、突然神に語りかけられます。ここで神は自分を紹介するのに、「わたしはあなたの先祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である。」(出エジプト3:7)と言います。イエスは、これが死人の復活を示しているというのです。一体どういうことでしょうか？

ある聖書仲介者は、神は生きている者の神であり、アブラハム、イサク、ヤコブの神と言うからには、彼らは今も天で生きているのだと解釈していますが、どうでしょうか？私は屁理屈のように感じてしまいます。もうすこし、深く考えてみましょう。

アブラハム、イサク、ヤコブと3代続いたイスラエル民族の先祖たちはどのような人たちだったのでしょうか。彼らは、決して安全を保障された豊かな人々ではありませんでした。彼らは寄留者、つまり現代で言えば難民です。彼らがどのような人生をたどったかは五書の第一の文書、「創世記」を読めばわかりますが、彼らのことを一言で描写している箇所が、5番目の文書、「申命記」7章7節にあります。神がさまざまな民族の中からイスラエルを選んだのは、彼らがどの民にもまして「貧弱」であったからだと書かれています。アブラハム、イサク、ヤコブ・・・彼らは、何の功績もなしにただ神の恵みと慈しみによってのみ生かされ、神がすべてであるような生き方をした人々でした。そして、この彼らの生き様が、神がどのような方であるかを証したのです。懸命に生きはしたけれども、人間的には決して立派とは言えない先祖たちでした。それでも神は彼らの名をもって御自身を紹介することを恥とはされなかった。それがこの「『柴』の箇所」です。

神がすべてであるような生き方。彼らが仕え証した神は、彼らの生命そのものでした。イエスもまた、そのような仕方で神に仕えた方です。このイエスの復活について、使徒言行録2:24-32でペトロが説教をしています。そこでペトロは旧約聖書の詩編16:8以下を引用しています。ペトロはこの詩編がイエス様の心だと考えたようです。詩篇16を読んでみましょう。

16:01【ミクタム。ダビデの詩。】神よ、守ってください

あなたを避けどころとするわたしを。

16:02主に申します。「あなたはわたしの主。あなたのほかにわたしの幸いはありません。」

16:03この地の聖なる人々

わたしの愛する尊い人々に申します。

16:04「ほかの神の後を追う者には苦しみが加わる。わたしは血を注ぐ彼らの祭りを行わず

彼らの神の名を唇に上らせません。」

16:05主はわたしに与えられた分、わたしの杯。主はわたしの運命を支える方。

16:06測り縄は麗しい地を示し

わたしは輝かしい嗣業を受けました。

16:07わたしは主をたたえます。主はわたしの思いを励まし  
わたしの心を夜ごと諭してくださいます。

16:08わたしは絶えず主に相對しています。主は右にいまし  
わたしは揺らぐことはありません。

16:09わたしの心は喜び、魂は躍ります。からだは安心して憩います。

16:10あなたはわたしの魂を陰府に渡すことなく  
あなたの慈しみに生きる者に墓穴を見させず

16:11命の道を教えてくださいます。わたしは御顔を仰いで満ち足り、喜び祝い  
右の御手から永遠の喜びをいただきます。

ところで、この詩編16の前半部分を、ペトロは引用しませんでした。この詩編の心を知る上では重要です。2節にはこうあります。「あなたはわたしの主。あなたのほかにわたしの幸はありません。」さらに5節、「主はわたしに与えられた分、わたしの杯。...測り縄は麗しい地を示し、わたしは輝かしい嗣業を受けました。」この詩人は、この世の幸せに恵まれなかった人だったかもしれません。そのおかげか、この人は、神がわたしの幸せだという境地に至ったのです。

この世で分け与えられるべき幸せはほとんどなかったが、わたしの分、わたしの杯は、神その方であり、それで十分だということです。「嗣業」とは土地のことで、生きる糧を与えてくれる大切なものです。当時、縄で測った区画が自分のものとして与えられました。けれども詩人にとって、それは実際の土地ではなく、神様ご自身のことだと表現しています。まさに、神がすべてであるような生き方です。そしてペトロは、わが師イエスの心をここに読んだのです。イエス様はこの心の故に復活したのです。使徒パウロもコリントの信徒への手紙一の15章で復活後に成就するのは、「**神がすべてにおいてすべてとなられる**」(28節)ことだと言っています。神がすべてであるような生き方、そこに永遠につながる生命があるのです。

ルカ福音書に戻りましょう。アブラハムもイサクもヤコブも、皆この世の生を終えました。その意味では死んだのです。けれども、彼らが自らの命とした神は生きておられます。彼らにとって命であった神が生きておられるということが、彼らの復活の希望だということです。

38節、「**神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神なのだ。**」とあります。実はこの訳では言語のニュアンスを十分に伝えきっていません。直訳するとうつす。「神は死者の所有ではなく、生者の所有だ。」逆に言えば、死者とは神を持たない者であり、生者とは神を持つ者だ、ということです。復活について、大変重要な教えがここににあります。私達は復活します。その条件は、神を嗣業として所有するということ、神がすべてであるような生き方、神のほかに私の幸せはありませんと言う生き方、自分が滅びでも神が讃えられることを喜ぶ人。

もう一度申し上げます。私は死ぬでしょう。でも、私にとって生命である神は生きておられます。これが私の復活の秘密です。「**すべての人は、神によって生きる**」(38節)。私のエゴは死んで、私の中で神が生きる。その命は永遠です。